九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日・韓両国語の伝聞表現のモダリティ : 話者の表現意図を中心に

呉, 先珠

https://doi.org/10.15017/1654600

出版情報：九州大学, 2015, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏　　名	呉 先 珠
論　文　名	日・韓両国語の伝聞表現のモダリティ ―話者の表現意図を中心に―
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教　　授　　松原　孝俊 副　査　　九州大学　　准 教 授　　李　　相穆 副　査　　九州大学　　教　　授　　松村　瑞子 副　査　　大阪大学　　教　　授　　岸田　文隆 副　査　　同志社大学　　名誉教授　　油谷　幸利

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、日韓両国語における伝聞表現を研究対象に取り上げて、「コミュニケーションの場における話し手の表現意図」という独自の視点から検討・考察を加えることで、①情報とモダリティ、②意味機能別のカテゴリー化に関する新たな仮説を提示している。公開審査会は一致して、その論証の的確さとオリジナリティある研究モデルの提示を高く評価した。
以下では本論文の要旨を紹介したうえで、その評価を述べたい。

本論は大きく７つの章で構成されている。

第１章では、まず研究背景を述べ、用語の定義及び表記、研究目的を提示した。さらに先行研究を博捜した上で、ムード、モダリティ、証拠性などの言語学的定義を通観し、その問題点と限界を指摘しつつ、新たに論究すべき研究課題を提示した。

第２章では、日韓両国語のモダリティと伝聞表現に関連する先行研究を通観した。これまでムード形式に対する研究が主流を占め、相応の成果を上げているものの、その一方で情報とモダリティに対する解明を等閑視したりするなどの問題点を指摘した。ましてや重要でありながらも、むしろほぼ手づかず状態であった伝聞表現をめぐる意味機能別のカテゴリー化などは未開拓の分野であると適切に指摘した。

第 3 章では日韓両国語伝聞表現を通時的観点から考察した。元来、日本語の「そうだ、ようだ、らしい」は物事の「様態」を表す表現であったが、その後に「推量・推論」として転用され、さらに「伝聞」にも拡大していった。この「様態」＞「推量」＞「伝聞」の意味拡大の順番が、話し手の認識世界における一つの発展プロセスであると指摘した。その一方で、韓国語伝聞表現は引用を起点とし、「伝聞」にも拡大していったと推論した。しかも丹念に収集した用例に依拠して、後期中世韓国語における間接表現を[引用動詞－[被引用文]]、[引用動詞－[被引用文]－(하-)]、[[被引用文]－引用動詞]の３パターンに分類し、しかもその多くが直接引用と解すべきだと論述した。

第４章では、「コミュニケーションの場における話し手の表現意図」の観点から現代日本語における伝聞表現を考察し、①情報共有の確保手段(自己情報か他者情報か)、②情報の入手経路、③情報に対する話し手の心的態度を表す戦略(客観的・不確か・曖昧など)、④情報が聞き手に及ぼす影響(情報判断への介入可能性)に注目することで、伝聞表現のカテゴリー化に努めた。その結果、推論「そうだ」＞「ようだ」＞「とか」＞「らしい」＞伝聞「そうだ」＞「って・という」＞「ということだ」＞「とのことだ」の順に右に移行するほど、情報判断における話し手の主観性、情報判断への介入が弱化する反面、聞き手の介入余地が高くなり、情報への真偽判断は聞き手に委ねられることが判明した。

第５章では、「コミュニケーションの場における話し手の表現意図」の観点から現代韓国語におけ

る伝聞表現を考察した。そもそも引用形式に由来し、しかも複雑な縮約・省略過程を経て文法化されているため、伝聞表現の数は少なくとも 37 に達すると報告した。しかも 37 に及ぶ韓国語伝聞表現を、日本語と同様な基準で、そのカテゴリー化に努めた。その結果、「-단다(tanta) > -답니다(tapnita) > -다더라(tatela) > -대(te) > -다며(tamye) > -다면서(tamyense) > -다지(taci) > -다네 >-다나(tana)」の順で右に移行するほど話し手の主観の介入が強くなるため、情報判断が話し手中心である反面、聞き手の介入可能性が低下すると判断した。

第 6 章では、日韓両国語伝聞表現のモダリティを比較した。①日本語伝聞表現は助動詞、複合助動詞、連体修飾の 3 形式において出現し、他方、韓国語伝聞表現の殆んどが引用に由来しているため、複合語尾、連体修飾形により出現し、さらに複雑な縮約・省略の過程を論証した。②日本語にはムードとモダリティの対立がなく「命題めあてのモダリティ」と「発話・伝達のモダリティ」の区別が有るのに対して、韓国語にはムードとモダリティの対立があり「命題めあてのモダリティ」と「発話・伝達のモダリティ」の区別が語彙的であり、曖昧であると、実に多くの用例を踏まえて丹念に論証した。

第 7 章では、本論文を総括しながら、概して責任を曖昧にしたがる日本語表現と自らの主張の正当性を押し通したがる思惟を反映する韓国語表現の特徴が、それぞれの伝聞表現の基底に存在するという結論に逢着している。

以上のように、本論文は博士学位論文として優れた内容をもつものであるが、申請者がさらに単に日韓のみならず国際的な研究者として成長するためには、今後改善すべき点もある。例えば、本論文の研究成果は、 従来の研究成果を重要な方向に拡張するものではあるが、申請者には、さらに研究のオリジナリティを高め、さらに網羅的な日韓伝聞表現の抽出に努めつつ、新しい研究分野を切り開いていくことを期待したい。

要約すると、本論文は、厳密で緻密な論証によって従来の研究成果を発展させた優れた論文だと評価できる。論文で得られた研究成果は、申請者が日韓対照言語学とモダリティ理論、ムード理論に精通した言語研究者として高い能力をもつことを十分に示すものである。口述試験では、論文の記述や考察の不十分な点が幾つか指摘されたが、いずれも大幅な改訂を要求するものではない。

ここに審査および面接の結果を踏まえて、審査員一同は呉先珠氏が博士（比較社会文化）の学位を授与されるのに十分な資格を有していると判断するものである。